

寄稿

「この世界の片隅で」

森藤 哲章（16期）



「おじいちゃん、おじいちゃん、なんで寝てるの?」。「腰が痛くてな」。階段をハイハイしながら上って二階で寝ている祖父に声をかけていたことや、暑い季節に葬式があったこと等をおぼろげながら覚えています。祖母から「おじいさんは戦艦大和の大工をしていたんだよ」と聞かされたこともなんとなく覚えています。

しかし、戦艦大和についての知識も乏しく、ただ死んだ祖父は大工をしていたのだということは子供ながらに認識をしていましたし、物置にある大工道具を見る度に祖父が使っていた物かなと思っていました。

最近、テレビで戦艦大和についての番組がしばしば放映されるようになり、戦艦大和は神格化されてきています。戦艦大和の話を見聞きする度に、「おじいさんは本当に戦艦大和の大工をしていたのかな、そんなに偉い人だったのかな、仏壇に飾ってある写真を見ながら育ってきたのですが、4歳頃祖父の顔をもっとじっくり見て認識し、戦艦大和についての話を聞いておけば良かったな。」と思うようになりました。

父親が残した過去帳等を見返していると、祖父は呉海軍工廠で35年も務め、組長にまでなっていたとのこと。なぜ、呉で働きだしたのか、軍隊手牒を見ると、明治38年頃に島根県から呉の方に移動して仕事をすることになったようです。大正4年には、私の祖母(島根県女子師範学校一期生)と結婚をして、呉の隣町である吉浦に住み、呉に通勤していたようです。

私の想像では、現在の安来市広瀬町西谷出身の長島(旧姓;小林)寛次という方が、海軍主計大尉をされていたことがあったようですが、その方が縁を持ってくれたのかもしれませんが。父親も祖母に連れられて江田島の長島宅を訪れたことがあったとのこと。

令和2年12月に、「旧軍港・呉の歴史と「戦艦大和」1日学校2日間」という題目で、ツアー旅行が企画されていました。このコロナ騒ぎの中での企画であり、前日まで「取りやめ」の知らせが届くのではないかと心配していました。

呉には数回行ったことがありますが、正式なガイドを受けたかったので待ちに待った旅行でした。新大阪駅の集合場所は換気の良いところでした。新幹線の中でも「車内では独自の空調をしております。ご理解ください。」との放送がありました。一日目は、宇品港からガイドさん付きのクルーズ船で呉港に行き、船上から戦艦や潜水艦を見学しました。テレビや写真でも見っていますが、晴天の中で海から接近の見学は感激するものがありました。

「ドラマで有名な“この世界の片隅に”に出てくる“すずさん”の住まいは、あの高い山の斜面あたりです。」とガイドさんに訪ねて教えてもらいました。当時の呉港が一望できたであろうと思いをはせました。



護衛艦[さみだれ]→支援艦[げんかい] →護衛艦[かが]→その奥に灰ヶ峰を望む



インターネットで見る[かが]
(全長:248m)

護衛艦[かが]は大きい戦艦であり、ガイドさんは「日本には空母は現在ありません。[かが]はヘリコプター搭載護衛艦ですが、誰が見ても空母ですよ。」と説明しておられました。

ホテル(安浦町内)には、大阪からの修学旅行生を乗せてきたバスが10台だけありました。予約キャンセルもあるようでした。コロナ感染予防に大浴場にも入らず、ベッドの枕・シーツは綺麗にセットされていましたが、更に充分の消毒スプレーをしました。

翌日はバスで呉に戻り、陸地からの見学でした。呉では一流のガイドさん達の説明がありました。



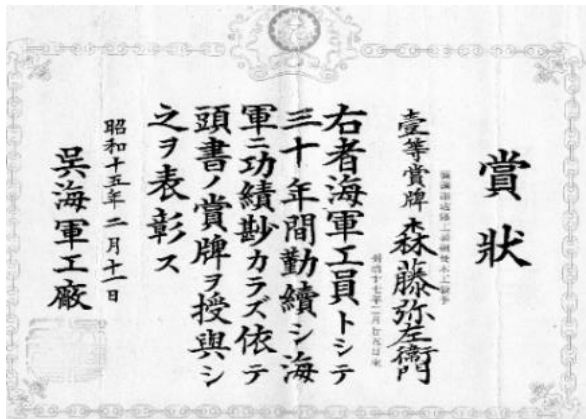
大和ミュージアム内にある1/10縮尺の
戦艦大和(大和の全長:263,4m)



澎湃館

アレイからすこじま前の澎湃館でのガイドでは、戦艦大和会の相原謙次顧問(元呉市職員で、大和ミュージアム開館や戦艦大和潜水調査と引き上げ・1/10縮尺の戦艦大和作成等に尽力された)が講演をされました。

私は手を挙げて質問し、あらかじめ用意していた祖父の資料（下の写真）を見てもらいました。「これはお家の宝ですね。戦艦大和の大工であったことを私が証明します。」と言ってくれました。



ツアーで昼食をした海軍料亭[五月荘；別名メイ]の前ご主人は、戦前の花街の写真等を見せながら楽しくお話をされました。「中曾根康弘元総理大臣は海軍主計科に勤務しておられたので、「懐かしいな」と言って訪れてくれましたし、石破茂元防衛庁長官は 4 度も訪れてくれました。」とのことでした。

大和ミュージアム前の「てつのくじら館」では、初めて潜水艦[あさしお]の中に入り潜望鏡も覗きました。

私の恩師である石川兵衛先生(奈良医大第一内科元教授・奈良医大元学長)は旧海軍兵学校第 74 期卒業生であり、周囲に数名の海軍兵学校の卒業生がおられました。尾前照雄先生(国立循環器病センター元総長)は、旧海軍兵学校第 75 期卒業生で石川兵衛先生と寝食を共にされた後輩です。

沢山の偉い人達と祖父の接点はなかったとは思いますが、道でのすれ違いはあったかもしれません。遠い昔のことに思いをはせています。

戦艦大和では沢山の方々が戦死されましたが、造船に関わってコールトール等の発癌物質も扱っていたと思われる祖父は 65 歳で亡くなりました。きっと腰椎に癌が転移して死んだのだと思うと、もう一つの戦死ではないか？と思ったりもしています。

以上